

# 愛知の博物館 No. 31



伊良湖で発掘された平瓦

## 目 次

・宋 胡 錄 の 宿 屋	横 田 正 臣	2
・名古屋市博物館の資料保存と活用	上 村 喜久子	4
・愛博協研修会に参加して	家 田 健 吾	6
・表 紙 写 真	伊 藤 務	8
・事 務 局 だ よ り		8

## 宋胡録の宿屋

横田正臣

ヨコタ南方民族美術館は東南アジア、特にタイ国北部を中心とする古陶器、織物を中心とした民族資料が中心である。個人美術館として、私自身が年数回は資料蒐集のためタイに渡っている。その旅行の一端を紹介してみたい。

我が国で南方陶磁といえばアンナム、宋胡録が有名で、古くから茶人などに親しまれてきた。宋胡録の語源はスワンカロクがなまつたものと考えられる。14世紀から16世紀初期に焼かれ、我が国にも当時輸入された。

私の友人T氏は愛知県宝飯郡一宮町金沢から出土した白濁釉の蓋付を所持している。

この宋胡録といわれる古陶磁の生れは、中部タイ、ヨム川の上流で、バンコクから50キロの行程。スワンカロクはスコタイの近くで、飛行機、鉄道、バスなどで行くことが出来るが大変不便なところである。国道101号線に沿った小さな町で、道路沿いに民家、商店などが200メートル位の間に並んでいる。

この国道をスコタイの方向に行き、左に曲ったところにスワンカロク唯一の宿屋がある。名もなく、看板もない、どうひいきめにみてもホテルとは見えない。夜明け前の三時ごろ、やっと宿にたどりついたが、大きな厚いチークの板戸が閉っている。板戸を力を入れて叩くと眠むそうな顔をした中年の女性が戸を開け顔を出す。この様な田舎で室のないことは今迄の経験で絶対にないので、最初から宿泊料を聞く、30バーツ（日本円350円位）とのこと、私は眠いのと、汗と埃で気持が悪いので、一刻も早く体を洗って寝たい。15、6才の可愛い女中さんも起きて来て、私の荷物を持って待っている。二階の室に案内されたが真暗だ、天井についている20ワットの螢光灯がつくまでに時間がかかり、2、3回パカパカしてやっと点灯した、その瞬間3、4匹のヤモリが驚いたのか動いた。この様子から室内には少くとも20匹以上いることだろう。これだけヤモリがいれば、いやな虫はないから安心して寝られる。便所とシャワーをたずねたところ、先に立って廊下の奥に行く、行き止りに昔の小学校の便所のようのが三つ並んでいて、大小の区別はなく、廊下と同じ高さ、便所というより押入れの感じ。シャワーがみあたらぬ、私はシャワーに案内をしてくれるものと待ったが動こうとしない、「シャワー」といって体を洗う真似をしたら、便所の板戸を開けた。よく見ると便器の真上に蛇口がついている。広さは80センチ位の正方形で天井はなく、照明もない、広い廊下の20ワットの煤けた螢光灯の光がかすかに入るのみ。数年前、トウタンに泊った時、住民と一緒に川で水浴したことを思い出した。目の前のシャワーと便器を見ていると、その時の水浴がなつかしくなった。戸を閉めると暗いので開けたままシャワーを使った。廊下まで水が流れ出し、板の透き間から下に落ちていった。階下はどうなっているか知らないが、何もいって来なかった。

朝10時暑くて目がさめた。早速、水浴に行く。宿についた時は暗くて見えなかつたが、室も廊下も透き間だらけで下の土間が見える。体を洗いながら、水浴と大小便が一度に処理出来、大変便利で衛生的な便所に思ってきた。

今日はシーサチャナライとコノイの窯を調査しようと考え、ナイロンの布袋にカメラ、拡

大鏡、スケールなど七ツ道具が入っているかを確認し、扉に南京錠をかけて下に降りた。一階の土間では若い女中さんが一人で食事をしている。どんなものを食べているかと覗く。食べないかというようにスプーンにすくってさしだす、遠慮せず食べたところ結構おいしい。私にも「作ってくれ」とたのむ、5バーツ（60円位）で買って来るのだといっている、5バーツ渡すと食事中にも拘らず買いに出かけた。2、3分でポリ袋2つをさげて帰ってきた。ご飯と、野菜と肉の煮たものを皿に盛ってくれた。美味しい朝食をすませ、調査にでかける。

コノイ窯では陶片を拾うことができたが、シーサチャナライでは何等得ることなく宿に帰る。荷物を室におき、ズボンだけを脱ぎ、汗を流しに行く。便器を跨いで水を出し、着たまゝ石鹼をつけ洗濯と一緒に体を洗う。これが私の収集旅行での洗濯方法。二日目になると便器の上での水浴も苦にならなくなった。

翌朝スコタイにでかける前に支払いをします。一泊で30バーツといっているが、日本では当然二泊になるのにと思い、10バーツ多く渡す。スコタイから三時頃かえり、又水浴をし、バスで出発する迄の時間、宿の女主人、女中さんと記念写真を撮ったりして時間をつぶす。帰りにはバス停まで二人で送ってくれ、その上、車中で食べるようだとドーナツの差入れまでしてくれた。

帰国後、写真は当然送ったが礼状はこなかった。次回行った時には写真を持ち出してきて大変喜んでいた。そして前回にもまして心からの歓迎をうけた。

このような蒐集旅行によって集められた資料は現在整理中で、正確な数は不明であるが、おそらく6千点はくだることはないとと思う。中には美術品としてのみならず、考古学の面からも新しい歴史がひらくれるものも多くあると思われるが、それは将来、それぞれ研究者の手に委せるとして、私自身としては、今後も集められる限り、蒐集を続けてゆきたいと考えております。

＜ヨコタ南方民族美術館 館長代理＞



ヨコタ南方民族美術館展示室

## 名古屋市博物館の資料保存と活用

上 村 喜久子

当館で収集する資料は、大別すると考古、美術・工芸、文献、民俗の分野に分かれる。素材も年代も、そして人々の生活との係わり方も異なるこれらの資料の保存・保管と展示について、一律に論ずることはできない。条例・規則を遵守し、前例を重んずることを宗とする公共機関の枠の中にあって、それぞれの資料に則した保存・活用のルールをいかに確立していくかが、私たち大型公立博物館学芸員の課題である。開館後未だ4年、経験は浅いが、収集資料に関する研究者・市民の方々の特別利用、他館からの出品依頼なども、最近とみに増してきている。ひとつひとつのケースについて、暗中模索を繰り返しつゝ、ルールを創っているのが現状である。以下、若干の私見を混えつつ、当館の状況を簡単に紹介させていただく。

当館では、資料を受け入れると全て市の備品として登録する。これは保管について、「館」として責任をもつ上で不可欠な手続きである。この際、資料の伝来、性格、そして将来の活用の為の便を勘案して、受入れの単位を決める。これを「件」とよび、1件ごとに基礎的なデータを記入し、写真を添付した基本カードを作成する。また、当館の資料分類表（1000項目）に照らして分類し、各分類番号毎に受入番号を付して、備品台帳とは別の分類別目録に登載する。この目録は順次刊行しており、一般にも有料で頒布されている。このことは、広く資料を公開し、活用の途を開く上で、基本となる作業といえよう。

一方資料そのものは、状況に応じて殺菌・殺虫処理を施した上で、収蔵票を付して収蔵庫に収納される。収蔵票と基本カードには、等しく収蔵番号・分類番号・分類別受入番号・1件内の点数が記入されており、目録・カード・資料の三者を誰でも対応できるようにしている。無論、資料の出納は責任者が定められているが、このシステムは、ことに複数の学芸員のいる公共博物館において、資料を私物化しないという原則を貫く上で、極めて大切なことと考えている。

以上のような作業を経ると、勢い資料の受入れから一般に公開できる迄には、かなりの時間を要することになるが、これは止むを得ない。学芸員個人でなく、館が将来にわたり責任をもつということは、個々の学芸員がこの整理作業のひとつにつけて責任をもつということだからであり、その事を理解して頂けるよう努めている。よく、組織の大きい博物館では、個々の学芸員の責任感が欠けると誤解されがちである。一人しか学芸員のい



名古屋市博物館常設展示室

ない博物館の場合と同列での比較は不可能であるが、組織としての責任を全うするためには、各学芸員にそれなりの役割が求められているわけである。

収集した資料の活用方法には、まず展示がある。周知のように展示は光・埃・温湿度の変化等により資料の劣化を招くことになるので、それなりの配慮が求められる。当館の常設展の場合、原則としては1年を3期に分けて展示替するが、資料の性質に応じて絵画など、展示期間を2週間に限定するといった場合も多い。他館からの出品依頼には、館の事業に支障のない限り2ヶ月以内でそれぞれの資料に則し、期間を調整していただいて応じている。但、昨今は展観事業が盛んになり、博物館施設以外の会場、あるいは学芸職員不在の組織等で催される場合がしばしばある。多くの方に活用していただくのはうれしいが、展示中の資料に対する基本的な配慮を欠いていることも稀でないのが実情である。こうした場合には、予め展示会場の状況、展示方法についてお尋ねするようにし、その上で可否を判断したり、必要な注文を付けさせて頂いたり、展示作業にはこちらから学芸員を派遣するという方法をとるようにしている。これらの仕事を通して、私たち自身も個々の資料についての材質・保存状況・希少性・耐久性その他、保存に関するデーターを再点検する機会とできる。

展示その他に活用された場合や、修復や保存処理を施した場合には、履歴カードに記録して各資料の履歴が相当が代っても分るようにしていくことも、昨年より始めた。

いずれにせよ、これだけのことを実施していこうとすれば事務量が多くなり、いわゆる「事務的」にことを進めて本末転倒になってしまう危険も確かにある。しかし、ともかくゼロの段階から皆で討議を重ねつゝ創りあげてきたこのシステムを整理してみて、改めて思うのである。資料の保存と活用は相矛盾するとよくいわれるし、確かにそのとおりである。それをどこで調整するのかが学芸員の仕事でもある。しかし、充分な整理、保存をすゝめることができ、より広い活用の途を開き、且つまた深い見識に支えられた活用によって、資料の新しい面が開発され、それが整理、保存に反映されることもある。つまり両者には相乗作用をもつ側面もある。この側面の開拓もまた、私たち学芸員の大切な仕事ではないかと……。

〈名古屋市博物館 学芸課主査〉

## 愛博協研修会に参加して

家 田 健 吾

まず、地下資源館の紹介をさせていただきたいと思います。小・中学生の学習を中心とし、資源と私たちの暮らしを結びつけ、省資源・省エネルギーの意識の向上、未来資源・エネルギー問題等について未来社会に対応する力を養おうという大きなねらいで、55年11月1日に開館いたしました。このねらいにそって、資源の探査・採掘・製品化の工程、主に銅・鉄・アルミニ・石灰石・石油をとりあげ、実物・模型・ビデオ・パネルなどで紹介し、また、新しい資源・エネルギーの開発状況も紹介しております。平日の予約団体にはできる限り館員が案内・解説を行っています。特別な事業としては、平日に豊橋市内の小学校6年生、中学校2年生を対象に、教育委員会の計画により授業の一環として、63校の学習が行われています。これは隣接の視聴覚教育センターとあわせて、各校が1日ここで過ごすわけです。地下資源館では、館が作成した「見学の資料」を参考に1時間の展示学習を行っています。「見学の資料」は展示物を見ながら空欄を埋めたり、気付いたことを書き込んだり、スケッチしたりする形式になっており、各コーナーについて3、4題をのせたプリント的なものです。そして、子供たちにグループをつくらせ、その子供たちが興味のあるコーナーを1、2選び、そのプリントの問題を展示物を見ながら考えていくというわけです。見学のポイントをしぼり、興味を深めさせる一方法だと思います。しかし、実際の展示学習は各校により異なり、ある学校では「見学の資料」にこだわらず、各コーナーについて興味のある点、気付いたことなどをメモさせていました。また、特に指示がなく自由に見学させる学校もありました。まったく自由に見学せる場合、館内でふざけあっている子、漠然と展示物を見ている子が目につきます。気付いたことなどメモさせる方法では、展示物のパネル、ラベル等を丸写しする子が目につきますが、中には丸写しの段階から一歩入って興味深く観察している子もいるようです。プリントを与えられ



豊橋市地下資源館

た子供は熱心にそのコーナーを調べますが、1枚のプリントの答えを探すにも展示物の配置がわからず時間が過ぎてしまうことが多いようです。プリントを利用した見学では、展示内容は知識として固定されやすいと思いますが、それも一時的なもので、学校のテストの時間のように答えを出すことだけに集中し、答えのもつ意味、可能性を想像することが少ないと感じます。授業の一環としての地下資源学習としてどんな形が望ましいのか、また、学校教育にこだわらずに博物館の教育活動の一形式としてどのように捕えたらよいのか、今後考えなければならない問題だと思います。

さて、先日の愛博協研修会では、各館の実情などお聞きすることができ大変参考になりました。資料の分類について名古屋市博物館では、一つの資料は一つの項目にはめこむとは限らず、その資料のもつ意味を多角的に捕え、それぞれの項目に記載する方針だとお聞きしました。実にすばらしいことだと思います。一つの資料を一つの枠内に押し込んで隔離してしまっては資料のもつ価値は薄れてしまいます。一つ一つの資料が尊重されるのは当然ですが個々の資料が有機的に結ばれてこそ展示が成り立つのだと思います。有機的な結びつけの組合せは無数にあり、組合せが自由にできるような分類・整理を考えていくことが大切だと思いました。資料の保存については、今まであまり考えることはありませんでした。科学系の博物館に共通していることだと思いますが、人間が解明してきた自然のしくみやその利用を理解してもらう展示を心がけているわけで、この理解を促すための資料は天にも地にも一つしかないということはそんなにありません。こういう点で資料の永年保存を考えるより現在の展示物、特に模型類のメンテナンスに気を奪われてしまうわけです。ここでもう一度実物資料の重要性を考えなければならぬと思いました。安易に模型、レプリカ、パネル等を使用していないかということです。レプリカ等はどんなに外形を似せて作っても本物にはかないません。本物はそれだけで説得力があります。著しい例は宝石です。子供たちが宝石のケースを囲んで本物かどうか議論しています。一目ですぐ似せものとわかるようなものはありませんから当然です。そして、イミテーションだというラベルを見つけると「なあへんだ」といってその場を去ってしまう子がほとんどです。本物ならばきっとそこから新たな疑問や想像がなされると思います。本物のもつ意義はきわめて大きいと言えるでしょう。今後も今まで以上に実物資料の利用を考えていきたいと思います。なにぶん生まれたばかりの館で、方向も定まらぬところが多いのですが、一つ一つ資源とくらしの中の製品とを結びつけていく中で、館独自の方向を見い出し市民に親しまれる博物館になるよう努力したいと思います。

〈豊橋市地下資源館 学芸員〉



研修会風景

表紙写真

伊良湖でやかれた東大寺瓦

伊 藤 務

渥美古窯が知られるようになったのはごく最近のことである。しかしだ正11年（1922）に田原町の百々陶器窯跡が国の史跡に指定されているので、焼物がここでやかれていたことが早くから認められていたといえる。

古い記録にも「貞享三年（1686）に伊良湖の山間初立という所から農夫が古い瓦を堀出した」という記事があって東大寺大仏殿瓦の図が描かれている。これが国の史跡となっている、渥美町伊良湖の東大寺瓦窯跡である。ここから出土する「東大寺大仏殿」銘の軒先瓦や「大仏殿」「東」の刻印瓦はその造りからみて鎌倉時代前期の瓦であるにもかかわらず、従来東大寺からは発見されていない問題の瓦であった。

ところが昭和40年から始まった伊良湖瓦窯の発掘と時を同じくして、東大寺では大仏殿の東岡上の鐘楼の修理工事中、屋根の平瓦のなかに、伊良湖瓦窯の刻印瓦が少なからず用いられていることが知られた。そのなかには、瓦窯跡の出土例と全く同じものもあるし、瓦窯ではまだ知られていないものもあるが、ともかく伊良湖瓦窯の製品が東大寺にはこびこまれたことが確実となった。時が流れ、800年後の昭和55年秋、伊良湖から土地の若者が祖先の偉業を解明しようと瓦を背負い、東大寺まで歩いたことはまだ記憶に新しい。東大寺への運搬ルートはいまだに明らかにされていない部分が多く、専門家による研究の成果がまたれている。

——「渥美的古代史を探る」（伊良湖自然科学博物館発行）より——

<伊良湖自然科学博物館長>

事務局だより

毎年秋になると、名古屋市内の各デパートを始め各所・各地区で、芸術の秋と云うか美術的催事が多く見受けられる。特に本年はそれが顕著に見受けられた感じがする。参考に協会加盟館で開催した中から主なものを拾うと以下のようになる。

伊勢神宮神宝展  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  7（熱田神宮宝物館）・五島美術館名品展  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  3（名古屋城）・近代日本美術の巨匠展  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  3（豊橋市美術博物館）・中世の名陶  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  5（常滑陶芸研究所）・秋季茶道具特別展  $1\frac{1}{2} \sim 57$  年  $1\frac{1}{2}$  1（桑山美術館）・三河の銅鐸  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  8（蒲郡市郷土資料館）・矢作川流域の石器

時代  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  0（豊田市郷土資料館）

・茶碗と茶 約  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  9（昭和美術館）

・大マンモス展  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  0（日本モンキーパーク）・猿投窯  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  9（愛知県陶磁資料館）・宮本三郎素描展  $1\frac{1}{2} \sim 1\frac{1}{2}$  8（愛知県美術館）……等々。

このように各館の催しが活発化してきた事は、非常に喜ぶべき事と素直に喜んでいる次第です。

「愛知の博物館」 No. 31

発行日 昭和56年12月

編集・発行 愛知県博物館協会  
名古屋市東区東桜一丁目12番1号  
愛知県文化会館内  
(052) 971-5511